

〔研究ノート〕

## 修学旅行の史的検討

——行軍・学修から観光・学修へ——

笠井雅直

### 要 旨

日本の修学旅行は明治以来、通常の科目学修と並ぶ中等学校の正規学修機会として実施されてきた。戦前は、中等学校に進学する同世代人数のほぼ11%が、戦後は中学校・高等学校のほぼ90%が修学旅行を経験・実施の機会を得ていたことは、近代日本における旅行の大衆化と、受け入れ先の史跡地・観光地の対応・革新の機会となる。従来、等閑視されてきたこの視点について、いくつかの事例をもとに明らかにした。戦前においては、「行軍・学修」、戦後においては「観光・学修」という修学旅行の特徴は、何れも旅行の機会を提供する点では共通していたのであり、本稿では、観光地における観光資源開発の機会となったことも明らかにした。

キーワード：修学旅行，中等教育，観光地，地域資源

### はじめに

日本における修学旅行の歴史については、我々自身が体験してきたことでもあり、学として取り上げられることは少なかったように思う。管見の限りでも、先駆的なものとして、白幡洋三郎『旅行ノススメ』（中公新書、1996年）[15]があり、栃木県立博物館の「第四十二回企画展『行楽・観光・レジャー～余暇の近代化』」（1993年）においても「IV『行楽』大衆化時代へ（前近代2）」の「2 修学旅行～旅の教育と普及」として取り上げられ[4]、最近では、磯田道史（「古今をちこち 修学旅行は軍隊式行軍」『読

売新聞』2019年10月9日、12版）が明治26年の秋季修学旅行日誌という史料をもとに初期の修学旅行について跡付けている[5]。白幡洋三郎の研究は、史的研究として行き届いたものではあるが、修学旅行の対象人数や氏の狙いである旅行の大衆化との関係について、そして受け入れ先の史跡地・観光地の対応・革新にまでは分析が及んでいない。以下で見るように、戦前は、同世代人数のほぼ11%が、戦後は中学校・高等学校のほぼ90%が修学旅行を経験・実施の機会を得ていたという歴史段階の変化と観光の大衆化との関係の分析は未だしとせざるを得ない。

## 一. 戦前の修学旅行

まず、戦前の学校制度について見ると、戦前の中等教育（12歳から18歳）は、1907年度までは、尋常小学校が、尋常小学校4年課程と高等小学校2年課程の6年間からなっていたが、それ以降に尋常小学校は6年課程となり、修了後に中等学校（男子5年課程）、高等小学校、実業補習学校などに進学する。女子の場合も、尋常小学校6年ののち、高等女学校（女子4年課程）に進学する。このように、男女ともに、1ないし2年の飛び級も含めて、尋常小学校、高等小学校修了後に中学校、実業学校（男子5年課程、女子は4年課程）を経て、専門学校と帝国大学へとすすむ [17]。

中等教育の制度の転換期の一つであった1907年前後に中学校を卒業する個別事例として、1937年に設立されるトヨタ自動車工業の三代目の社長となる石田退三のケースで見ると、同氏は1888年の生まれで、1902年に愛知県知多郡小鈴谷村の鈴浜高等小学校を卒業して、滋賀県県立第一中学校（現、彦根東高等学校）に入学している。同中学校（5年課程）の4年次に、石田（当時は沢田退三）は「官費で入れる学校ならどこでもいいと思って、海軍兵学校、海軍機関学校、水産講習所の三つを受験」している。五年目も受験するも失敗し、滋賀県内の小学校の代用教員となっている [12]。海軍兵学校、海軍機関学校、水産講習所は中学校の上級学校であり、中学校から上級学校への進学も飛び級が可能であった。中学校自体も、その受験資格は12歳以上ということから滋賀県県立第一中学校においても、入学者の年齢が多様であり、在学生の年齢の幅も大きいものであった。同校から上級学校への進学先も、高等学校、私立諸学校、官立諸学校となっていた。私立大学

などが「私立諸学校」と分類された時期であった [3]。中学校は高等小学校からの入学先であるとともに、上級学校に進学する際に、必ず通る学校であった。そこで、正規の課程科目の学修とともに、広く、修学旅行が制度化されていたのであった。

この時期の中学校、中等教育（12歳から18歳、中学校と高等女学校）への入学者は男子が7.6万人、女子が8.4万人の約16万人（1926年4月入学者）とすると、この年代の尋常小学校への入学者（1920年入学）は男子が71万人余、女子が69万人余であり、中等教育にまで進んだのは、同世代人数約140万人の11.4%に当たる [17]。戦前の修学旅行を体験することができたのは同世代の11.4%となる。

修学旅行の個別事例として滋賀県県立第一中学校について見ると、同校は1880年に開校の彦根公立中学校（修業年限6年の高等中学校）が、滋賀県尋常中学校（1887年）、滋賀県第一尋常中学校（1898年）を経て、1899年に設立された中学校であった。同校においては、1889年には、生徒70名（在學生、217名）が職員引率の下、岐阜県下石津郡養老へ「長途行軍演習」に出かけている。6月10日から13日までの3泊4日であった。翌1890年には5月と10月に「習学旅行」が実施されている。1894年10月には、岐阜、名古屋方面への5泊6日の秋季行軍も実施されている。秋季行軍は、名山、大川、大都会、広野、そして師団などを巡ることで、「学術上の知見」と「困苦を忍び欠乏に耐える剛毅不屈の気性を養成」という効果につながっている。同校の記録で「修学旅行」という名称が定着するのは、1898年からであり、滋賀県の訓令や文部省の法令に修学旅行という用語が登場した辺りとしている。同校での実態は「行軍旅行」としている [3]。「行軍・学修」

の段階であった（同校、1908年に彦根中学校と改称）。同校の修学旅行の実施学年については、1910年の「生徒修学旅行ノ状況」に記されているところによると、4月23日に全生徒が蒲生郡老蘇村へ、5月3-4日に全生徒が名古屋市へ、11月5-9日に第5学年生徒が舞鶴宮津小浜敦賀地方へ、11月5-10日に第4学年生徒が奈良畝傍吉野高野和歌山地方へ、11月8日に第5、4学年生徒中旅行不参加者・第3学年以下生徒が愛知郡高野永源寺へというように、全学年において「修学旅行」が実施されている。第一次世界大戦後の1919年には、第5学年生徒の修学旅行先は「名古屋、鎌倉、横浜、東京地方」となる。1926年には、同校の修学旅行は全学年で実施される。第5学年は4泊5日、第4学年は3泊4日、第3学年は1泊2日、第1、2学年は1日の日程で実施される。第5学年は5月に関東方面であり、第4学年は5月に奈良・大阪方面の旅行であった。修学旅行の時期についてみると、1927年は第5、4、3学年とも11月の実施であり、同様に、1928年は全学年が5月の実施となり、1929年には全学年が10月に実施される。その後も、1936年までの実施時期は5月となっている [3]。「旅行・学修」への変化した修学旅行の実施時期は5月と10月であった。

## 二. 観光地の対応

修学旅行先として全国から集まってくるようになった京都においても1914年に『修学旅行 京都史蹟案内』（西田直二郎・魚澄総五郎著、京都帝国大学学友会発行）が発行されている。文学博士三浦周行監修、文学士西田直二郎と文学士魚澄総五郎編纂ともものしい [8]。同書の序の文章から明治末・大正初頃の修学旅行の

在りよう、修学旅行と京都とのかかわりが知られる。

「京都は千百年間の皇都にして、今尚皇宮の所在地たり。其間我文化の中心として光輝ある国史の事蹟に富み、政治に宗教に学問に芸術に、其遺蹟遺品の徴とすべきもの随所に存し、国民の欣仰すべき幾多古人の墳墓も亦到處に弔すべく、一たび其境に臨むものをして俯仰感慨に堪えざらむ。これを教育上に応用すれば、其効果の顯著なる蓋し意想の外にあらん。全国諸学校の修学旅行を此地に試みるもの年中踵を接するは宜なりと謂うべし。是等の旅行者中最も多数を占め、且つ教育上最も其必要を感じるものは中等程度の学校在学者なり」[8]。

修学旅行の地としての京都、その史跡を巡ることは「教育上に応用すれば、其効果の顯著なる」ことは計り知れないのであり、特に「中等程度の学校在学者」にとってそうであるとしている。実際、全国諸学校の修学旅行先として年中絶えることがないとしている。さらに、同書の「凡例」にも、中学程度の諸学校の修学旅行用として編纂したものとあるように、中等学校の修学旅行が主であったことも知られる。

同書は「京都市を中心として附近の修学旅行者の巡歴すべき史蹟を記載」したものであるが、日程についても「中学程度諸学校修学旅行の日数を略々見計らい日程表は一日より三日までとし夫れ夫れに対して主要なる史蹟を割当て」る。修学旅行の実態を念頭に置いて「短時間にして京都に於ける著名なる個所を多く巡覽し得るよう、道路の迂曲、時間の空費等なきを期し、排列に意を用いたり」としている。できるだけ多くの史蹟を効率よく巡る修学旅行の一般的な姿

も浮かぶ。なお、同書の推奨する観光日程として、一日程（第一案）は、桃山御陵、御所、平安神宮、知恩院、清水、三十三間堂、東本願寺とあり、明治天皇墓の桃山御陵を除けば、戦後における修学旅行の京都観光と変わらない。日程が二日になると、二日程（第一案）として、神社仏閣以外に博物館や円山公園、動物園、大学が追加される [8]。

京都以外の観光地の修学旅行に対する見方は少し異なっている。次の文を見られたい。

「修学旅行としての伊香保 伊香保が修学旅行地として最適地であることは、特に記さなければならぬ。東京からでも、僅か一泊で、榛名の奥まで探ることが出来る。上野駅を一番で立てば、十時半には着く。旅館は何百人でも収容出来るし、殊に旅行の季節たる春秋は、浴客の比較的少ない時である。近来学生の待遇法も研究して、小学生の如きは、僅少な宿料で足るようにしてある。伊香保の見学資料は、極めて豊富であって、これが、修学旅行地として最適の第一の要件であろう」 [2]。

修学旅行の「季節たる春秋は、浴客の比較的少ない時」にあたることから、伊香保温泉が年間集客数の平準化を図る上で修学旅行はこの上ないものであった。とはいえ、修学旅行を受け入れるためには、学生の待遇法たる修学について研究・整備することが必要となる。具体的に「一、理料的資料」として、温泉の湧出、水力電気、山の植物と動物を、「二、地理的資料」として、標式的二重式火山、火口原、火口原湖などの火山と温泉をあげ、「三、歴史的資料」として、戦国時代の北条、武田、上杉の「争奪地」であり、「戦跡が多い」ことをあげている。

さらに「四、文学的資料」として「山容の秀麗は、必ずや見るものをして、天然の美と、山霊の神秘に対する情感をそそらしめずにはおかない」というように深山幽谷の文学的な効果をあげることで、理科、地理、歴史、そして文学の分野をなんとか揃えている [2]。

日本の観光地における繁閑の落差は江戸時代以来のものであった。山形県の温海温泉の事例で見れば、江戸時代においても、湯宿が浴客一人から、徴収し、役所に上納する湯銭に関する、月別表示の「寛政3年湯温海村湯役銭上納表」（1周り〔七日〕1人35文）によれば、8月がとびぬけて83貫720文であり、以下、7月の62貫580文、5月の42貫805文、9月の41貫370文、そして1月の24貫920文と続く。12月は1貫120文と極端に少なくなっている。年間を通じて、最も多かったのは「田植後と除草後と稲刈後」であった [1]。江戸時代以来、一般の観光客が集中するのは春と秋以外の時期であった。この季節から外れる時期における修学旅行はその規模からしても、観光地にも対应的な修学機会の設定とその宣伝を迫るものであった。

### 三. 戦後の修学旅行と観光地の対応

戦後の修学旅行については、我々がよく体験してきたことではあるが、1959年4月1日から1960年3月31日までのちょうど第一次高度成長期の「岩戸景気」という好景気の時期における調査結果によってみる。修学旅行を実施した学校数は1959年5月1日現在の小学校数、26,916校のうちの76.9%が実施しており、同じく中学校数13,134校の87.7%が実施しており、同じく高等学校数4,615校の89.3%となっている。高等学校の実施率は1953年度の実施率65.7%からの大幅増となっている [13]。高

度経済成長とともに修学旅行の広がりも加速化したものと思われる。1970年においても修学旅行実施学校の割合は、中学が95.6%、高校が88.6%であった。中学高校合計で93.5%の学校が修学旅行を実施している [7]。実施率の高さを持続する戦後の修学旅行は、各観光地に独自の「学修効果期待」を宣伝せしめることとなる。

戦後当初における修学旅行のねらいについて見ると、「修学旅行のねらいは国民教育的見地から国の文化中心地を直接に見聞する経験をもたせること」であった。そのことは、修学旅行先について、実際の入込数（1959年度実態調査、中学・高校合計）から見て、京都（65万人、千の位以下切り捨て、以下同様）、東京（57万人）、奈良（51万人）がとびぬけていることから了解される。それに続くのが江ノ島鎌倉（31万人）、日光（31万人）、大阪（27万人）、伊勢（19万人）、箱根（16万人）、大分府（16万人）、福岡（8万人）であり、以下で検討する愛知の「名古屋・熱田・瀬戸・犬山・日本ライン」の入込数は1万人であり、福岡の8分の1程度にとどまっている [13]。

戦後における修学旅行の実施時期については、中学高校の修学旅行参加生徒数の合計で見ると、月別では、5月が210万人でトップであり、以下、4月の154万人、10月の98万人と続く。以下、3月の93万人、6月の79万人とかなり少なくなる [13]。4月、5月、10月に実施される修学旅行は観光地にとっては恵みの雨であった。同時期の観光地については、全国統計によるものではないが、個別事例についていくつか見ると、まず、大規模な人数をさばける温泉地の例として岩手の花巻温泉への月別の集客をバス輸送人数で見れば、乗客数の多いのは、8月の2万1005人、6月の1万7182人、9月の1万6652人と続く。5月は1万5834人、10月は1

万2673人であり、乗客数が1万人を切るのは3月、11月、2月であった [6]。さらに、観光地能登半島について、金沢鉄道管理局調査による各観光地の最寄駅の乗客数に関する「昭和34年度 能登主要観光地推定客数」によって能登半島への集客数を月別見ると、多い順に8月が6万5947人、7月が5万4793人、6月が5万827人となっている。5月は4万7738人、10月は3万1913人であり、旅行客数のピークからはずれていることがわかる [14]。財団法人日本観光協会が1968年11月に、東京・大阪・名古屋住民の過去1年間の観光旅行について調査した結果を月別に見ると、8月がピークであり、次に多い時期は10月であった。「年代の上の層は秋の旅行を、年代の若い層は夏の旅行を楽しむ」という傾向がみられるとしている [11]。修学旅行客の集中する「日光」では、1988年の「月別入込み観光客数の推移」によれば、当然のこととはいえ、やはり修学旅行の集中する10月が「最も入込客数の多い月」となっており、次いで8月、5月となり、この3ヶ月で総入込客数の約45%を占めるという。一方、「12月から翌4月まではオフシーズンとなり、入込みは大きく減少する」 [16]。日光は、修学旅行先としても、一般観光客の見学先としても全国化していたのであった。

修学旅行の集中する京都、奈良などの地域以外の観光地においても、修学旅行への対応は推し進められていた。修学旅行が再開した戦後の比較的早い時期の対応の事例として名古屋市について見る。名古屋市は、修学旅行について、「見学地選定の条件としては、『学生、生徒がわが国の文化、経済、産業、政治等の重要地を直接に見聞することによって、教科学習や特別教育活動を拡充することができる』ことが最も大切かと思えます」として、「名古屋市はこの条

件を満たし得る代表的な都市と信じます」と宣言している [9]。「名古屋へ修学旅行をされる皆さんに」と案内している『名古屋 御見学御案内』（1953年）では、戦前以来の見学先である東山動物園、東山植物園、名古屋港、名古屋城、そして熱田神宮等を紹介するだけでなく、名古屋独自の修学機会としてスポーツと産業をあげている [10]。

名古屋市は力説する。「名古屋は中部日本のスポーツ王国であると云っても誇張ではなく野球に庭球に、その他種々な競技に巨歩を印しています」として、戦後第五回国民体育大会開催を機会として「運動施設は完全になり、東洋一の瑞穂総合運動場」が代表的なものであり、「総面積一万余坪、観覧席には五万余の観衆を収めることができる」とする。さらに飛込台もある振甫プールは改装されて「観覧席は一万二千の観衆を」収容し得るものとなり、「夜間の競泳にも用いられる」とする。さらに金山体育館、中日球場、そして修学旅行向けとは必ずしも言えないような「中村の競輪場、土古の競馬場等」をあげている。激しかった空襲によって破壊された名古屋の戦後復興振りを押し出しているようにも思える。

さらに、産業についても、次のように述べる。

「由来、名古屋は商業都であると共に、産業都であります。学生諸君の見学できる工場も少くありません。安藤七宝は日本の誇る美術工芸であります。世を挙げて機械工業の時代に手芸品と云ってもいい製作工程の美術品が製作に多忙であります。反対に日本車輛、名古屋造船と云った重工業も盛大で、日本陶器、或は名古屋陶器といった世界的な産物も有名であります。世界的と云えば、日本ミシンはアメリカへも大い

に輸出しており、ブラザーミシンと称し年三万台から出しています。又日帝工業其の他の自転車工業も特筆さるべきであります。……其の他三菱電機の電動機、変圧器、扇風機、或は新愛知時計電機の計量器、工作機など戦後七年着々と生産に馬力をかけられております。これらの品々の包装用には合板の製作が必要で市内南部の方では中村合板其の他が活躍しております。又日本ビール名古屋工場、或は渡辺製菓を始め新道の菓子等々産業都市名古屋は大活躍であります」 [10]。

産業都市名古屋そのものが学修機会の場になるとしている。名古屋特有の菓子問屋街・新道菓子問屋街は貸し切り・観光バスの半日・一日コースの見学先となっている [10]。さらに、具体的な工場見学先として案内されているのは、新三菱重工大江工場（自動車関係）、日本ミシン工場（ブラザーミシン）、三菱電機名古屋製作所（変圧器その他）、愛知時計電機瑞穂工場（時計、ガスメーター等）、平野製作所（織機）、東洋プライウッド（合板）、日本ビール名古屋工場（ビール）、そして中央卸売市場（生鮮食料品の取引）、火力発電所（中部電力） [9] というように、名古屋の主要産業そのものを修学旅行の学修の場として案内している。産業都市名古屋が観光資源となったのである。

## まとめ

明治以来の修学旅行は、戦時下、滋賀県立彦根中学校の1939年の第4、5年の修学旅行が神宮参拝旅行となるも、参加人数に大きな変化はなかったように [3]、修学旅行は「戦争を生きのびた」のであった [15]。戦後の修学旅行も

90%近い学校での実施となったことは、戦前・戦後を通じて、観光地に対しても独自の対応、「学修効果」をあらためて打ち出すことをせまるものとなる。観光地にとっては、観光資源の整備とその開拓の機会となったのが修学旅行であった。

## 付記

これまで、毎年かなりの数の教育実習生の実習校訪問（中学校・高等学校）を続けてこられた故廣美里先生にご苦労さんと言いたい。

## 文献

- [1] 温海町史編さん委員会, 温海町史 上巻, 初版, 温海町, 山形県, 1978年, 746-747。
- [2] 群馬県衛生協会・群馬県温泉振興調査会, 上毛の温泉, 六版, 慶文堂書店, 東京, 1926年, 41-44。
- [3] 彦根東高等学校校史編纂委員会編, 彦根東高百二十年史, 初版, 創立百二十年記念事業実行委員会, 彦根市, 1996年, 217-219, 263, 279-280, 323, 378-380, 581-588。
- [4] 石川明範執筆・編集, 行楽・観光・レジャー～余暇の近代化 第42回企画展図録, 栃木県立博物館, 宇都宮市, 1993年, 110-111。
- [5] 磯田道史「古今をちこち 修学旅行は軍隊式行軍」『読売新聞』2019年10月9日, 12版, 30。
- [6] 岩手日報, 岩手年鑑 1953年版, 岩手日報社, 盛岡市, 1953年, 225。
- [7] 環境文化研究所, 観光産業総覧 昭和47年版, 環境文化研究所, 東京都, 1971年, 133。
- [8] 三浦周行監修, 西田直二郎・魚澄總五郎編纂, 修学旅行 京都史蹟案内, 京都帝国大学々友会, 京都市, 1915年, 序1-2, 凡例1-2, 1-26。
- [9] 名古屋市経済局貿易観光課, 名古屋への修学旅行案内, 名古屋市経済局貿易観光課, 名古屋市, 1956年, はしがきのページ, 16-17。
- [10] 名古屋市金融貿易課, 名古屋 御見学御案内, 名古屋市金融貿易課, 名古屋市, 1953年, ページづけ無し11-12。
- [11] 日本観光協会(社団法人), 大都市住民の観光実態—東京・大阪・名古屋—, 社団法人日本観光協会, 東京都, 1969年, 11。
- [12] 日本経済新聞社編, 私の履歴書第七集, 16版, 日本経済新聞社, 東京都, 1971年, 初版は1959年, 9-10。
- [13] 日本商工会議所編, 観光概観1962-3年版, 日本商工会議所, 東京都, 1962年, 1303, 1305-1307, 1310-1311。
- [14] 立教大学ホテル研究会, 能登半島(観光総合調査報告書), 立教大学ホテル研究会, 東京都, 1960年, 152-153。
- [15] 白幡洋三郎, 旅行ノススメ, 再版, 中央公論社, 東京都, 1996年, 127。
- [16] 栃木県・日光市, 国際観光地『日光』活性化基本計画(調査結果概要版), 栃木県・日光市, 栃木, 1990年, 3。
- [17] 米田俊彦, 「視座」, 米田俊彦責任編集, 日本の教育課題〈第10巻 近代日本人の形成と中等教育〉, 再版1刷, 東京法令出版, 東京都, 1999年, 初版は1997年, 7-9。

[Research Note]

## Historical research on school excursions and tourist spots

Masanao Kasai

### Abstract

The purpose of this article is to examine school excursions in Japanese secondary education. The school excursion is the one of the most characteristic features of Japanese secondary education. The school excursion also trains Japanese people for tourism. The school excursion is a popular trip in Japan. However, there has been no study of school excursion history. The school excursion has not been an important historical research theme. But tourist spots have been encouraged to develop local resources for tourism. Before and after World War II, Kyoto city promoted various temples for sightseeing programs. After World War II, Nagoya city promoted programs about heavy industry and sports stadiums. Due to Kyoto and Nagoya cities' promotions, the school excursion has been an important factor in the development of domestic tourist spots. We will discuss how school excursions have been mitigating the decline in tourists, though the number of customers in spring and autumn are still reduced.

**Key words:** school excursions, Japanese secondary education, tourist spots, local resources for tourism